

## 第二芸術論と雑誌「八雲」

——久保田正文を軸に——

内 藤 明

### 一、はじめに

一九四五年の敗戦と、その後の社会状況は、日本の言語空間に極めてドラスティックな変容をもたらし、日本や日本文化への認識や批判にも、大きな変化が見られた。戦後という時代がある程度相対化されはじめている現在、その変容や、その変容をもたらしたものについて、さまざまな再検討がなされている。青木保は「戦後日本は、日本の伝統的な生活様式から価値観にいたる複合的全体が、この二十世紀の『工業・都市文明』によって浸食され、変容しながら、それを消化し、あるいは同化しようとしてきた時代としてとらえられる」とし、「戦後日本」が示したのは、「敗戦による日本社会全体の『立て直し』という課題の下での、受け身による新しい『近代化』の『やり直し』である」と述べている。<sup>(1)</sup>敗戦、被占領という状況下、「近代化」という一つのベクトルが社会を領していく中で、人々が日本文化の過去と現在をどのようなようにとらえ、その上にどのような未来を模索しようとしたのか。戦後五

十年を経て、その戦後の上に築かれながらも、そこから新たな時代に入ろうとしている現在、さまざまな局面における戦後の言語空間の出発を確認していくことは、現在と未来を考えていく上で重要であろう。

ここでは、そのような立場から、敗戦後、旧来の日本文化の象徴としての俳句や短歌への批判としてあらわれた、いわゆる「第二芸術論」とそれに引き続く問題を、その議論の一つの舞台となった短歌雑誌「八雲」を中心にして見ていきたい。いわゆる「第二芸術論」は、先の青木の論では、敗戦後十年の「日本文化論」に特徴的な、日本文化に対する「否定的特殊性の認識」の時代のものとして位置付けられている。伝統的な定型詩の否定論は、日本の社会が、強く〈近代〉を志向するときあらわれる。その意味では明治以来何回も提出されてきた問題だが、それが特に浮上してきたところに、敗戦による戦中、戦前の文化の否定という時代背景があろう。本稿では、主として短歌を中心に、その否定論で提起された問題を確認し、「八雲」での展開を追いながら、伝統詩がもっている問題性と意義を検討するための基礎的な作業を行いたい。

## 二、第二芸術論・短歌否定論の展開とその時代

### 1

「第二芸術論」とは何か。まずその議論の概要を確認しておこう。

いわゆる「第二芸術論」という名称は、桑原武夫（フランス文学者 一九〇四―一九八八）が発表した「第二芸術——現代俳句について」（『世界』46・11）にその名の由来がある。<sup>(2)</sup>当時、日本の現代小説なども批判してきた桑原

は、この論で、手許の俳句雑誌から、「現代の名家と思はれる十人の俳句作品」十句と、「無名あるひは半無名の人々の句」五句をまぜ、作者名を消して示し、その価値判断や、作者名や、名家と無名作者の区別などを同僚、学生などに問うた経験述べながら、読者に俳句の問題性を問いかけていく。そして、掲出した句が、作者名を外した一句一句では自立性が乏しくて俳句同好者以外には言葉自体が分かりにくいこと、「一句だけではその作者の優劣がわかりにくく、一流大家と素人との区別がつかねる」ことなどを、西欧近代の小説のありかたと対照しながら批判していく。その上で、「俳句においては、世評が芸術的評価の上に成立しがた」く、俳句結社の党派性や俗物性を生むこと、「一つの芸術様式が三百年もそのまま続き得たといふことは、日本の社会の安定性あるひは沈滞性を示すもの」であること、また芭蕉の精神も神秘化され、形式化されて、マンネリズムを生んだこと、などをいい、「人生そのものが近代化しつゝある以上、いまの現実的人生は俳句には入りえない」ことを主張していく。そして、俳句の命脈は、水原秋桜子がいうように「自然現象及び自然の変化に影響される生活」（桑原はこれを「植物的生」とよぶ）を描くところにあるといい、そういったものは、老人の菊作りを「芸術」と呼ぶことが躊躇されるように、「第二芸術」と呼んで、他と区別するのがよいと思ふ」と述べていく。

この桑原の論は、俳句のある一面をとらえての批判であり、さまざまな反批判はできるが、「ヨーロッパの偉大な近代芸術」を対極に意識しながら、日本文学、日本文化の一つの象徴としての伝統詩形である俳句を批判的にとらえており、敗戦後一年余の時代相が強く投影されている。そしてそこには、近代的な自立した個性ある主体によってなされるべき文学の近代芸術化への志向、西欧の近代精神を日本の文学に取り入れ日本の文化自体を変えていくこととする志向がうかがえる。先の青木の言い方でいえば、まさしく「新しい『近代化』の『やり直し』」として敗戦

後という時間において提出されたものといえるが、それが歌壇とか俳壇とかのレベルでなく、雑誌「世界」を舞台にして、「もし文化国家建設の叫びが本気であるのなら、その中味を考へねばならず、従つてこの第二芸術に對しても若干の封鎖が要請されるのではないかと思ふのである」と文化論としてセンセーショナルに書かれたために、「第二芸術論」として大きな反響があつたのである。

2

しかし、このような伝統詩への否定は、桑原が先頭を切つたものではなく、戦中における伝統詩、特に短歌の称揚を反転させる形で、敗戦という状況がすでに用意していたものであつた。桑原より早く白井吉見(文芸評論家 一九〇五―一九八七)は、雑誌「展望」の時評的な四ページの「展望」欄(46・5)で、後に「短歌への訣別」と題された文章を発表している。<sup>(3)</sup>白井はここで、「不幸な戦争中、第一線にあつた無名の兵隊たちが夥しい短歌や俳句を制作した。そのあるものは銃後にも伝へられ、深い感動を喚びおこしもした。(略)しかし、我々としては、ここにも考へて見ねばならぬ重要な問題があると思つてゐる」と言い、敗戦の様相が兵隊の胸にも迫つてきた頃においても「帝国日本への愛情を、肉親朋友へのそれを越えて短歌俳句によつて示したこと、それが何としてもあはれでならぬのである」と述べていく。そして、「短歌乃至俳諧が執拗に果し、今も果しつゝある」日本人の「民族的性格」として、

自己が置かれ、或は追ひこまれた立場を、全体の周囲との關聯に於て考察し、理會し批判するといふ傾向や雰圍氣、さうした線に沿つて眼を開かしてゆくものとは本質的にちがつたもの、むしろさうしたものを遮ぎる

ものとして働かずにはゐない

といったことをあげ、日本人の客観的な自己認識や批判精神の欠如を指摘していく。また、「様々の矛盾を包んでゐる広範な現実の全体的追究から独立した抒情乃至花鳥風月の写実の如きは、今日すでに生きた写実たり得ないのでなからうか」として、降伏の八月十五日を歌った歌々が、「うつつのみ声ききたてまつる」「御声の前に涙し流る」などその表現、発想を同一にしていることを指摘し、また、それらは宣戦布告の時の歌の「畏ききはまりただ声をのむ」「感極まりて泣くべくおもほゆ」などの歌とも同一であることを述べていく。<sup>(4)</sup>そして、「短歌形式を提げて、現実に立ちむかふことは、つねに自己を短歌的に形成せざるを得ないといふ事実」、「短歌形式になじむ限り、合理的なもの、批判的なものの芽生えの根はつねに枯渇を免れるわけにはゆかぬ」ことを指摘し、次のように論を結んでいく。

この俳諧なり短歌の性格と運命とを、世界的規模と展望のなかに、躍動しつつある今日の現実のなかに、今こそ冷静に把握すべき時ではなからうか。そして、今こそ我々は短歌への去り難い愛着を決然として断ち切る時ではなからうか。これは単に短歌や文学の問題に止るものではない。民族の知性変革の問題である。

白井の主張は、戦争を支え、続行させた「民族的性格」を批判し、それを乗り越える「知性変革」を求める契機としての短歌への批判である。白井は後に当時を回想し、「僕は少年のころから歌が好きで、わけてもアラギ系統のそれにはなじみがあつた」といい、長い間、愛好して来た歌が、戦争前後に「あんまりになさけないすがたをさけ出したのだから、ひとごとではなかつたのだ」と述べている。<sup>(5)</sup>そのような短歌への愛着を持ちながら、短歌形式がもたらす発想の類型化を指摘し、それが変化する現実をとらえ得ない弱点を批判し、またそういった短歌的な

ものが生み出してきた日本的主体のありかたを批判したものとええよう。桑原の論が、俳句一句の自立性の欠如を指摘してその芸術としての限界性と日本文化の一面を批判していくのに対して、臼井の論は短歌における発想の類同性から短歌的なものにみられる日本人の批判精神の欠如を批判していく。戦争と戦時下の社会や文化への悔恨と傷みを基底に、日本文化と日本人への批判と一体となりながらこのような俳句・短歌への批判がなされたわけで、その論の当否はともかく、そこに戦後の言語空間の一面がよくうかがえる。そして、このような否定論は歌人にも衝撃をあたえるところとなったのである。

3

ところで、こういった伝統的定型詩の否定論は、明治以後、幾度となく主張されてきた。例えば、明治15年（一八八二年）に刊行された『新体詩抄』は、西洋の詩に範を求めながら日本に「新体詩」という新しい詩の形の誕生を促したもののだが、その序で外山正一は、和歌や川柳や唐詩などは、短小なるゆえ、「其内にある思想とても又極めて簡短なるものたるは疑なく、和歌や川柳で表せる思想は「線香烟花か流星位の思に過ぎざるべし」と批判する。「簡短」たる伝統詩には、現代の「連続したる思想」がもりこめな（6）いという批判であり、そこから、明治の文語定型詩としての長詩＝新体詩のスタイルが生まれ、そのスタイルによって多くの翻訳、創作が成された。そしてまた、歌人の側からも、明治の末期や、大正末から昭和初めにかけてなど、短歌がいずれ滅亡し、またその芸術的意義を失っていくだろうとの論が提出され、議論を呼んだ。近代化がとくに意識されて近代的な事象や思想や精神を表出しようとするとき、前近代からの形式を継承している定型詩のありかたとその命脈が問われたのである。

このような批判に対して、短歌内部においても、昭和初期には、口語短歌や自由律の運動、定型詩の自由詩への解消の議論、短歌におけるモダンズムの試みなど、さまざまな変革がなされてきた。だが、それらの変革は昭和十年代の日本回帰やナショナルな動きの中で抑圧されてきた。その流れの中で、敗戦後の思想・表現の自由、プロレタリア短歌の再興などは、短歌の世界の内部においても、短歌の型式や内容に対する抜本的な変革を求める契機となった。そして、桑原や臼井のような総合雑誌における文化論としての定型批判とは異った形の、短歌や歌人への注文も、すでに敗戦後の状況の中で書かれ始めていた。

文芸評論家の小田切秀雄（一九一六―）は、46年2月に創刊された「人民短歌」の創刊二号に「歌の条件」という論を載せている。<sup>71</sup> 小田切はまず、この小文を「折角自由になったのだから、ひとつ思ひつきり自由に振舞つて、芸術らしい芸術を創らうではないか」という一文から始める。そして「歌壇などといふ枠が実にばからしい枠だといふことをはつきり見極めて行く」べきこと、「趣味的な『作者』兼読者などといふものは、歌の世界から一掃した方がよほどさっぱりする」ことなどを述べ、「従来の歌の世界にわだかまる一切のつまらぬこと愚劣なことを黙殺して、自分の歌を一挙に芸術の目のくらむやうな高さまで押し上げていく努力に没頭」すべきことをいう。そしてそのための条件として、「抒情する個性的な主体の、独自の主体としての劇しい主観的内容の躍動」をいい、「卑俗な反動と凡俗の停滞の一切に対立してわき立つ闘ひの精神、美しいものをその美しさの全内容に於いて生き生きととらへ得るひろびろとした新鮮な感受性……」等々その具体相をあげる。そしてそれを「必要な条件」とし、その上でさらに、「主体内容の歴史的な高さ」が主体の充実の質を規定し、主体の長い時間に於ける展開の可能と挫折とを規定することをいう。また小田切は、「観念として、知識として、関心の仕方としての進歩性」は「芸術にとつては

何でもない」が、先の「必要なる条件の充実といふ場合に当つてその充実の内部をさし貫き、その充実の強度と躍動を保証する尽きざるエネルギーとして生き働くときはじめて意味をもつて来る」というが、このような展開の基底には、「歴史的に低いもの、遅れたものの反動的なものとの闘ひに駆り立てられる可能性をうちに孕んでゐる」ところの「芸術家に協力しよう」と述べるマルキシズムに立つた小田切の立場がある。そしてさらに、そのような内部活動が短歌や新短歌詩型の枠をおのづとあふれ出て、「シラー風の長詩にまで繰り展げられざるを得なかつたり」『現実世界と人間の運命の入組んだ構造の長篇小説』的追求に逸脱して行つたりすることを大胆によしとしよう」と述べていく。

小田切の論は「進歩的」立場からの短歌への要求であり、また作者の独自の「主体性」を求めるところに桑原、白井の論にも通う「近代」的なものへの志向が見られる。そして、エネルギーの充実により作者が短歌の枠を越えて他のジャンルに飛び出ていくことの示唆は、定型の限界論、短歌否定論を内包するものであるともいえよう。全体としては、旧来の短歌の制度的なものを否定し、短歌再生への期待を語ったものだが、変化せざる固定的な表現形式をもった短歌にある限界を見るところに、大きくいえば時代の流れとも呼応した、一つの歴史観があるといえるだろう。

見てきた桑原、白井、小田切の論は、それぞれの立場や観点を異にするが、46年という敗戦後の社会の急激な変化の中にあつて、短歌といった詩型に向けられたまなざしと、それを包む文化状況の一端をうかがわせる。短歌や俳句が、その内実よりは文化の一つの記号として語られることによつて、歌壇や俳壇といった閉じられた世界を越えて語られるようになったのは、短歌や俳句にとっては皮肉なことであるが、結果的に、敗戦後一年の言語状況が



生み出した定型詩への批判・否定は、短歌と短歌を取り巻く文化に大きな刺激と困惑を与えたといつてよい。そして、このような状況下で雑誌『八雲』は創刊されたのである。

### 三、「八雲」の創刊とその特徴

#### 1

「短歌雑誌 八雲」は、46年12月、「編輯人」を久保田正文として株式会社八雲書店から発行され、48年3月まで同氏を編集人として全14冊を出した。この雑誌の成り立ちについて、最近久保田自身が詳しく回想している。<sup>(8)</sup>それによると、故郷飯田にあった久保田は（久保田は一九一二年生まれ。東大美学科在学中に逗子八郎を中心とした新短歌の雑誌「短歌と方法」に加わり、卒業後は教員をしながら埴谷雄高、平野謙らの「構想」に加わるなどしたが、「信州文学」に執筆した小説に起因して治安維持法違反容疑で検挙され、帰郷していた）、46年1月頃、新聞紙上の「八雲書店」の編集者募集を見てそれに応募し、4月はじめに上京して八雲書店の社員になった。そして、久保田の記すところによると、「入社早々に、短歌綜合雑誌を創刊するという話がほぼ確定していることを知った」が、「当然伊藤穠一氏（同社編集部員で歌人 筆者注）の編集であらうと思った。誌名も『八雲』と、ほぼきまっているらしかった。木俣修氏も、四月ころから週一回ずつ、囑託のような形で顔を出しはじめていただろう」ところが、「編集会議のとき、私は、短歌雑誌を出すなら、小田切さんや白井さんやのかんがえかたに沿った方向で編集しなくては新しい雑誌を創る意味はないだろうという意味のことを思いつきで放言した。社長はたちまち乗ってきて、それ

では君、『八雲』の編集をやれ、と言った。私は大いに面くらったが、木俣さんも賛成で、しだいにそういう雰囲気  
が固まってきた」という。

実際、『八雲』に展開された方向が、先に見たような「小田切さんや白井さんのかんがえ」を發展させた要素をも  
っていることや、その文章執筆メンバーを見ると、そこに久保田の影響が強く読み取れ、また久保田自身、編輯後  
記（通巻4号まで。その後は狩野金三による編集後記）や最後まで連載した「歌壇展望」で自らの主張を強く打ち  
出している。久保田は同じ文章で、「歌壇情勢一般にうとい私は、その他作品依頼歌人選定についてはもっぱら木俣  
さんにたよった」と述べているように、その作品面や、全体の枠組みでは木俣修（一九〇六―八三 歌人・国文学  
者）の指導助言が強く働いたようだが、雑誌そのものの基調をなした文章や企画の面では、久保田の問題意識が強  
く投影されていたといってもよいだろう。久保田は上京とともに新日本文学会に入会し、また22年には戦後文学の  
一面を主導する「近代文学」の同人となり、近、現代文学に関する多くの著述をなしている。その久保田を編輯人  
とすることで、『八雲』は、時代の短歌否定論を強く意識し、戦後の民主主義、民衆主義的変革に呼応しつつ、また  
近代的主体の確立、芸術の自立を求める立場に立って、日本文化における短歌の問題をめぐり出そうとしたといえ  
よう。短歌綜合雑誌でありながら、編輯人の意向をかなり誌面に反映して、歌壇の秩序に囚われずに外部に開かれ  
ようとしたところに、短歌雑誌としては稀有な「八雲」の存在がある。

2

さて、久保田のこのような立場を鮮明にしているのが、「久保田」の署名をもつ創刊号の「編輯後記」である。こ

の一文は「自由の日が来て、なんでもうたへる様になつたと歌人は悦んでゐるのであらうか」で始まるが、これは先の小田切の文章の冒頭との繋がりを思わせる。そして、

我われの国の、短くない歴史にとつて、始めての、民主主義革命の時代とは、実は、最も古い——それ故に、從來最も「日本的な」と云はれた文学ジャンルとしての短歌の生命に対しても、肯定的にも否定的にも、決定的な時間である。

と述べ、それにも関わらず現在の歌人たちにその問題意識が薄いことを嘆く。その上で、「八雲」は、「短歌の運命を探究する公の機関たむことを念願」し、「短歌が、真に文学の一環としての生命を自覚し、芸術のきびしい途に繋がりを求めるか否かを実践的にこたへる試練の場を提供する使命を果さむと志向」し、「アマチュア的余技主義を峻拒する代りに、正しい意味の専門歌人の育成により、短歌そのものの生命の飛躍を期待する」と記す。そして、「八雲』をして、低俗頹廢の歌壇現実に対して、真に正しい方向を指すアンチ・テーゼを結晶させることこそ、ただに歌人のみならず、あらう。そして、かかる対立から、妥協なく、厳正なシン・テーゼを結晶させることこそ、ただに歌人のみならず、日本文化、それ自体の責任であらう」と述べていく。

このトーンの高い「編輯後記」は、閉鎖的、ギルド的な歌壇ジャーナリズムを否定しようとする「八雲」の指向、とくに久保田の志向するものが明確に示されている。歌壇の外部から投げ掛けられた短歌否定論を時代の問題意識として歌人に突き付けるとともに、短歌大衆としての作者ではない、専門的な創作主体としての歌人による、自立した芸術としての短歌を求めようとしたものである。そして、文中には「正しい意味の」「真に正しい方向」といった語が見られるが、それが模索の中のものとはいえ、そこには一つの向かうべき方向の存在が確信され、それへ向

かつていこうとする編輯者の意思がうかがえる。歌における「専門歌人」性の指向と「民主主義革命」のもたらす短歌の民衆化との間にはある問題と矛盾もあるが、閉じられた世界のものとしてでなく、日本文化の一環として短歌を考え、それを変革していこうとする問題提起は、戦後という時代の中で多くの読者に受け入れられ、刺激を与えたといえるだろう。

3

では、実際に「八雲」はどのような誌面を展開していったのだろうか。篠弘は「『八雲』編集の役割」で、「八雲」が

(一) 第二芸術論議を咀嚼する場となったこと

(二) 実力ある歌人の秀作を誇示したこと

(三) 近代の否定的な分析を、かなり系統的に試みた点

をあげ、「かたくなに短歌を擁護しようというよりも、評論家や詩人の参加を仰ぎながら、短歌のあるべき方向を模索する姿勢で一貫していた」ことを高く評価している。<sup>10</sup> 全14冊の内容と執筆者は本稿末尾の総目次と索引の通りであり、篠や木俣の論に詳しいが、ここではもう一度全体を概観して、その特徴を見てみよう。

まず作品についていえば、五十首詠を中心に、一定の評価のある作者の大作を毎号掲載していることに一つの特徴がある。その作者は、斉藤茂吉、釈迺空、土岐善麿などの大家から中堅まで、ある意味ではバランスが取れており、「歌壇情勢一般にうとい私は、その他作品依頼歌人選定についてはもっぱら木俣さんにたよった」という久保

田の言の通り、木俣修の意向が推測される。また宮柊二「小現実集」、近藤芳美「埃吹く街」など、戦後の短歌状況の中での、それぞれの志向と方向を明らかにしている著名な一連も発表されており、木俣修自身、「冬曆」（創刊号）、「一隅」（48・1）など、現実や時代状況を見据え、表現の揺れを見せながら、白秋的な世界から脱却して、自らの新たな世界を築いていこうとする作を載せている。木俣は後に、「毎月の五十首詠の発表は戦後の新風顕彰ということ、作家情熱の回復ということなどの上において、歌壇に多くの刺戟を与えたと断じてよいであろう」（注10 論文）と述べているが、「八雲」の作品欄は、短歌そのものへの批判が強くなっていく時代の中で、実作をもって第二芸術論・短歌否定論に答えていこうとする木俣の立場と意欲を体現させようとしたものだったといえるだろう。

ただ、作品面において、「八雲」は一つの潮流を作ったり、新しい才能を掘り出したり、といったことはしていない。作品批評の面では、歌人以外に批評を書かせて仲間褒めを排した厳しいものがあり、また短歌の他に、俳句や詩や小説を載せ、短歌の相対化をはかっているが、特定の作品傾向を押し出したり、ある可能性を引き出し伸ばそうという編輯はされていない。木俣のある平衡感覚や「公の機関」（先掲編輯後記）の意識がそうさせたともいえるが、また、時代の短歌否定論に対して、実際の作品による目に見える形での反応や新しい流れは、早急には出て来ることができなかったともいえる。「八雲」は創刊号で「新人詠募集要項」を出し、その後も新人詠を募り、また「新人」特集を組むが、必ずしも成果があがったとはいえない。また久保田は自身、歌人をさがすため、多くの歌の雑誌を見たが、「私の得た結論はいかに新人がゐないか、といふこと、或いは、期待すべき新風を予告する息吹がどこにも存在しない、といふことを知らされるに終った」（「新人について」47・3）ことを述べるに至り、また小田切秀雄も、「八雲」の新人特集を批判してその感想を「徒勞」と名付けている（47・10）。短歌否定論に作品で対峙していく

には、それに対峙すべき短歌の本質論や方法論に裏打ちされた作品や、全く新しい感性による作品が必要であろう。そういうものを提示できなかったところに、文化論に重きが置かれて具体的な短歌の状況とは必ずしも呼応しなかった当時の短歌否定論のひとつの限界や、強固な伝統性のある大衆性をもった短歌の、容易には変化せざる性格がうかがえ、また、短歌における論と作の重なり合いの難しさもが浮き彫りにされているといえよう。

さて、このような作品面に対して、「八雲」の大きな特色はその評論、批評の面にあるといつてよい。本稿末尾に付した「文章執筆者索引」に見るように、「八雲」には、歌人以外の執筆者がかなりの部分を占める。それは文芸評論家、英・仏・中などの外国文学研究者、国文学者、音楽評論家、詩人、俳人、小説家等々と多彩であり、とくに雑誌「近代文学」の同人や執筆者<sup>(12)</sup>が目をはひく。その中には、短歌とはクロスしないものや門外漢であることを強調した文章も見られるが、歌壇の枠を越えて短歌及び文学の本質を求めようとする「八雲」の志向がうかがえる。

その論は、本稿の末尾の「総目次」で大体の傾向がわかるが、特に「特集」の形で成された問題提起に、「八雲」の指向がうかがえる。例えば47年新年号では、「歌よみに与ふる書」として、中国文学者の吉川幸次郎「他山石語」と、小田切秀雄「衰弱した歌・その再建」を載せる。吉川はここで、「短歌の音律が、五、七、五、七、七、を守りつづけてゐるといふことは、この文学が、過去の習慣に忠実な文学」であることを示すが、「現在の短歌は、必ずしも特異な詩歌たることによつて、自己の存在を主張するよりも、他の詩歌と内容を共通することによつて、その存在を主張せんとしてゐる」ように思われるといい、また「せつかく日常の生活の中に、感動の種子を見出しながらも、それを三十一字にまとめきへすれば、それだけで満足し、それ以上の反省を加へないといふのならば、日本人

の論理的指向能力を、いやが上にも乏しくする憂ひも、皆無ではない」と述べる。その書きぶりは穏やかだが、伝統詩型である短歌に特殊性とある限界を見、その限定の中での歌の充実を促しており、それは歌人以外の論者の短歌に向けるまなざしの一つの型といえよう。また、小田切は正岡子規、与謝野晶子、石川啄木ら「近代短歌史上の芳烈な諸個性」が大正以降衰弱し、その末に戦争短歌があったとし、それを歌人が自己批判し、「歌ふに価ひするだけの新しい切実な人間内容、他方にそれが歌はれるための表現上の新しい可能」を創りださねばならない、と述べる。小田切の先の論の延長上にあるが、近代短歌創生期の个性的、情熱的文学的営為を評価し、その後現在に至る歌における個や情熱の衰弱を批判するのは、先の吉川の論の展開とともに、短歌に向ける一般的な視線を代表する。ともども、歌壇外部から短歌へ向けられた「歌よみに与ふる書」の典型といえよう。

この特集をはじめ、「八雲」は、「国語問題」(47・3)、「自然観の問題」(47・5)、「結社の問題」(47・7)、「叙事詩の問題」(47・9)、「詩歌の韻律」(47・11)など、短歌の特質とそれを包み込む日本の詩歌、言葉、文化のアクチュアルな問題を、かなり総合的に特集し、それぞれの専門家に論を書かせている。それぞれが、時代において時宜を得ているとともに、短歌の本質的な問題として、過去、当時を貫き、現代においても有効性を持っており、企画におけるアンテナの広さを示しているよう。

また、それとは別に、いわゆる「第二芸術論」の延長として、桑原武夫「短歌の運命」(47・5)、小野十三郎「奴隷の韻律」(48・1)などの重要な論を掲載している。桑原はここで、「芸術とは個人が自己の生きる世界との間の交互作用によつて新しい経験を作りだすことである以上、形式即内容であつて、物質的精神的に変化した環境は必ず新しい形式を要求せずにはおかぬ」という「芸術史の法則」を示し、伝統的定型詩としての短歌の限界をいう。そ

して、「三十一」文字の短い叙情詩は、あまり社会の複雑な機構など知らぬ、素朴な心が何か思いつめて歌い出るときに美しいが、「複雑さをこめての幅のあり、ひだのある感動を歌うにはあまりに形が小さすぎ、何かを切りすて、歌わざるを得ない」として、茂吉の初期や、啄木を評価しつつ、現代の歌の実作の衰弱を指摘する。そして、

短歌界にも西洋文芸思潮は急速にしみこみつつあつて、識者の老婆心にもかゝらず、現代短歌は「近代化」をめざすに相違ない。しかし、それをつゞけて行くうちに、がんらい複雑な近代精神は三十一字には入りきれぬものであるから、その矛盾がだんだんあらわになり、和歌としての美しさを失い、これならいつそ散文詩か散文にした方がよいのでないか、ということがわかり——このことは日本社会の近代化の成功如何にもふかく関係するが——短歌は民衆から捨てられるということになるであらう

と述べていく。「第二芸術」の延長にあつて、日本の「近代化」と重ねながら、短歌の命運を論じているが、ここには、ある意味では、直線的な進化、進歩の図式が見られる。桑原の論には、自身が評価する近代における和歌の革新、復興の意義や、現代の可能性がのべられておらず、「複雑な近代精神」といったことについても、現在から見るとさらに異なつた視点が提出されよう。また「民衆」ということについていえば、この時期から展開されていく「民衆詩」論の展開や、今日に至る「民衆」概念の変容など、考え合わせべき問題はいろいろある。その意味で、桑原の論は、西欧「近代」を観念的なモデルとした、一つの近代主義的な発展史観であり、それを單純に短歌に当て嵌めている傾向がある。しかし、先にも述べたように、激しく変化する戦後の状況の中にあつて、時代の社会的、精神的変化をとらえた短歌が十分には芽生えていなかったことも事実だろう。

一方小野十三郎は、「短歌のリリズムや俳句的発想の本質を突く活発な理論活動が見られるにもかゝらず、そ



れは表面的な風波を立てるにとどまって、歌人や俳人の各々の世界は昔のまゝに安泰である」として、

短歌や俳句をめぐってなされた桑原や小田切の批評に私があきたらないのは、ロジックとしてそこに透徹したものはあるけれども、いつの場合でも、この短歌や俳句の音数律に対する、古い生活と生命のリズムに対する、嫌悪の表明が絶対に稀薄だということである。特に、短歌について云えば、あの三十一字音量の底をながれている濡れた湿っぽいでれでれした詠嘆調、そういう閉塞された韻律に対する新しい世代の感性的な抵抗がなぜもっと紙背に徹して感じられないかということだ。

と述べる。そしてこのような、批判性を欠いた古い抒情詩の音楽、「奴隸のリリシズム」は、単に短歌だけでなく、日本の詩にも小説にも広がっている性格のものであるとする。そして、このような短歌的抒情、短歌的詠嘆を拒否し、変革していくところに、現代の批評と文学のありかたを模索しようとする。これは、白井の主張に繋がりがながら、さらに詩人としての感性をとおして、短歌のもつ抒情性の問題性をえぐるうとしたものといえる。「短歌的抒情」そのものを言語化することはなかなか難しく、小野の論は具体的ではないが、ここでも短歌を一つの象徴として日本的感性や、批判性の欠如への批判がなされており、日本的な土壌への抵抗が強い言葉で示されているといえよう。このように、「八雲」は歌人以外の執筆者を多く起用して評論を書かせることにより、いわゆる第二芸術論・短歌否定論に関わる問題を発展的に展開している。その中にはクボカワツルジローの論（短歌の新方向」47・6）のように、当時の短歌否定論の形式と内容に関する「公式主義」を批判し、真正面から短歌の本質を原理的に論じようとしたものもあるが、しかし、短歌否定論に歌人自身がどのように対応し、それをどのようにに発展させていったかは、「八雲」における歌人の文章からはなかなかよみとれない。ただ、「短歌の運命に就いて」（47・1）と「短詩型文学

の批判に応う」(同・6)の二つの座談会においては、短歌否定論に対する歌人の向き合い方の一端を見ることができ  
る。前者は創刊二号、先の「歌よみに与ふる書」が掲載された号だが、白井吉見や、英文学で評論家の中野好夫、  
国文学者の能勢朝次、歌人の岡野直七郎、木俣修、五島茂、広野三郎が参加している。(この座談会について、久保  
田は、「じつは私は、この三時間ちかい猛烈なやりとりを、かなり徹底的に編集した。もちろん、速記記録は、ひと  
とおり出席者に見てもらったうえであるが、ムダな雑音はすべて消し、話の運びを論理的につながるように、つな  
いだり切り離したりして、読者にわかり易いように編集しなおした」と述べ、「近代文学」の座談会からの示唆を語  
っている<sup>(8)</sup>)。

この座談会の全体の流れは、白井、中野らの、短歌に否定的な見解に対して、例えば五島が「現代短歌といふも  
のは御話よりももう少し発展した本質と作品群をもつた文学だとおもふのです。戦争中こそ大きい偏向がありまし  
たけれども充分御承知と思ひますが、新派和歌革新運動以降半世紀に亘る現代短歌史は局外者からみるとはつきり  
しなくてもてんで封建的伝統的なものと思はれるのは全く心外であつて、実際には近代人の意識、感覚の表現とし  
て、種々の要因ももち西欧文学のロマンティズム、リアリズム等をも摂取しつゝ、成長して今日の表現世界をし上  
げたものです」と近代短歌の歴史的発展や近代性を説明しながら歌の現在を肯定するなど、必ずしもしつくりいく  
ものではない。しかしまた、日本の近代の特徴や、短歌や俳句の「現実の複雑な思想の底にもう一つ流れてゐる、  
根本的な生命の慟哭といふか悲しみの声といふか、さういつたやうなものが極めて素直な形で、端的に現はれて行  
れた世界」(能勢朝次)としての可能性なども話題となつていき、その中で、木俣は、白井の論への感動、共鳴を示し  
た上で、

複雑豊富な感動内容をもう一度今日の時代に於いてわれ／＼の手によつて短歌の形式の中に盛れるか盛れないかといふことを、踏張つて試みて見なければならぬとおもふ

と述べ、短歌は小説やドラマと同等の効果を挙げる形式ではないものの、「短歌が今日の複雑な現実に立ちむかふことが出来ないものだといふことには承服出来ぬ」と述べるなど、否定論を基底において、短歌の可能性への考察や、またその上での短歌への意欲を示していく。

ここには、第二芸術論・短歌否定論を、自らの問題として歌論や作歌に溶し込んでいこうとする木俣の意欲が浮き彫りにされている。ある意味でそれは、三十代半ばの久保田が時代の短歌否定論を通して歌人たちへ突き付けた刺激を、四十代はじめの歌人であり文学史家である木俣が真摯に受け止めている風景ともいえ、それはそのまま「八雲」の編集の指向の大枠をなすものともいえるだろう。また、6月号の歌人、俳人による座談会で木俣は、「歌壇あるいは俳壇の閉鎖的な独善的な在り方」を問題にし、「結社革命」の必要もいつつ、「歌は何というたつて、私小説みたいなもので作家の肉体と生活とから生み出して行く他はないものだ」という『分』を自覚して、そこから歌でなければあらわし得ない世界をあらわして行くという努力をしなければうそだ」と述べている。木俣の志向は、歌を取り巻く制度や環境への批判を強めながら、短歌の形式自体がもっている特徴の認識とその今日的な生かし方に比重がかかつていくようだ。

このように、「八雲」における歌壇外部から寄せられた刺激は、必ずしも歌人の作品や論の中に生な形で目に見える成果を生んだとはいひ難いものの、木俣を始めとした歌人内部に、あらためて短歌の歴史と現在を顧みさせる契機をもたらしした。そしてそれは、次第に、歌人をして、ジャンルとしての短歌の特異性や限界の認識と、それを裏

返しにした短歌の限定的肯定とその日常的な実践とに向かわせていったといえるのではないだろうか。

#### 四、「八雲」と久保田正文

1

さて、雑誌「八雲」の指向を概観してきた。それぞれの論・作は、個々の問題性をはらんでいて、それを総体としてまとめることは困難であり、別途、個々の問題をとおして考察したいが、ここでは、この「八雲」の基調を主導していった久保田の主張を追いながら、そこにあらわれている問題意識と、その問題点を見ておきたい。久保田は毎号、時には雑誌の特集と重ねながら「歌壇展望」を書いていく。毎号の連載は、「八雲」において久保田だけであり、その意味でもこの連載は、久保田の指向をはっきり示すと同時に、当時の歌に関わる言語空間の一面をよく示している。そのいくつかをみてみよう。

まず創刊号（46・12）で久保田は、前田夕暮の文章を引用しながら、かつては「感覚的には充分に、近代的な歌人」として出発し、非定型、新短歌の領域にまで拡張した夕暮が、現在は「『創造』は『叡智』や『知識』とはかかへりない」こととして、「かれ自身のうちのアニミズムを肯定し『靈動的境地』と『植物的生活感情』を讀じ」る「東洋的坊主主義、合理主義を経過しない嚴肅主義<sup>リゴリズム</sup>へ、人間的にも、芸術的にも頽唐していった」と批判する。そして、夕暮の近代性が「感覚的近代性以上に深まる」ことができなかつたのは、「明治以後の日本自体が、完全に近代化してゐなかつた、といふ事情に根ざし」ているとし、また、「近代の確立を経験してゐない日本にとつて、『日本的な

もの』とは、その性格のなかに、何かの程度に於いて、封建的なものも、同時に翳なしてゐると思はざるを得ない」といい、ゆえに「革新的な子規の『歌よみに与ふる書』の旗の下に集まつたアララギ派」も「宗教的鍛練道と、封建領主的牙城を築き、ギルドの洞窟と化し」、また「生命の躍動と、官能の奔騰をうたひあげたといはれる明星の系列」も、才能ある歌人はうたと訣別し、然らざる者はマンネリズムに墮し「安易なただごと歌に余命を留める」ことになったという。そして、

吾われはことによると、定型短歌といふものが、その根本的性格に於いて、どうにも近代的なものの形成に逆行せざるを得ぬ様な制約を含むものかもしれない、と結論したくなる。

と述べていく。だが、齊藤茂吉については、その多くの否定面を持ちながらも、『赤光』において、「日本の歴史的制約に於いて可能な限り、人間的、芸術的に近代化されてゐたと考へうる」し、それは細々と戦後の作品にまで底流として流れているとする。そして、茂吉の近代性と夕暮のたどつた道の差異が、「個人の資質によつてのみ決定された事柄であらうか。あるひは短歌といふ文学ジャンルそのものの生命の内に、それだけ幅広い可能性がひそんでゐるといふことであらうか」と問うとともに、「今こそ、短歌自身の力によつて、それをあかしする時」が来たとし、歌人自身が、桑原、小田切、臼井などの言葉をその視野に入れながら、その使命と時代を自覚すべきだという。久保田のこの文章は同号の「編輯後記」とともに、極めて大きな問題提起であり、論にはある図式があるが、当時の雰囲気をよく伝えていよう。しかし、現在この文章を読むと、ここでいわれている「近代性」は、その対立するものとして東洋的坊主主義、非合理的な嚴肅主義、穩遁的生活、觀照的な自然詠風詩などが具体的にあげられているのに対して、「近代性」自体は自明のこととして前提にされているためか、具体的にはあまり語られていない（も

ちろんそれがある程度推測することはできる。また茂吉への例外的な評価があるが、そこにあげられている戦後の一首「うつせみのわが息々を見むものは窓にのぼれるかまきりひとつ」だけでは、久保田のいう「近代性」をそこから明確に読み取することは難しい。むしろ、この文章からは、旧来の日本的なものを否定する中で「近代」という言葉が時代の中で共有されていたある力や（それは「近代の確立を経験してゐない日本」という言説の中によくあらわれている）、斎藤茂吉という一人の個性的な作者への深い傾倒が強く読み取れる。その意味では、久保田における「近代」への指向は、「非近代性」「前近代性」の否定に強く領導されたもので、先の青木保の言葉でいえば日本文化に対する同時代の「否定的特殊性の認識」をうかがわせるものであるといえよう。そして庶幾されるべき「近代」は、西欧近代を一つのモデルにしつつ、そこに至るプロセスやその全体的把握やその限界性についての考察は、模索の中にあるといつてよいだろう。

しかし、いずれにしろこのような問題提起は、先の桑原の論における「近代」の語がもつ問題性をも抱えながらも、日本の「近代」を問い、また茂吉や広くは短歌形式と「近代」との関連を問う契機を見出だそうとしたものといえる。実際、「八雲」はその後、茂吉とその限界に関わる論を多く載せている。久保田の第一回目の「歌壇展望」は、日本的近代の否定という久保田の視線を通して、短歌形式と近代性との相関を問うていくことになり、そこには、時代がもっていた「近代」という語のある絶対性が浮き彫りにされているともいえよう。

ところで、この時期の久保田の「近代」への視線をうかがわせるものとして、「自然について」と題された通巻4号の「歌壇展望」（47・5）がある。ここで久保田は、横光利一の文章をヴァレリーと比較しながら、「ヴァレリーの場合では、人間と自然とが、はつきり対立してゐるが故に、より高次の美しい調和が成立する風景への、新しいス

タイルの自然描写であるのに、横光氏の場合では、もう自然も人間も、もみくちやで、奇怪な、不気味なイメージが、アメーバの様に貪婪な触手を刻々に、繁殖させてゐるにすぎぬ」と批判する。久保田のこのような批判を成り立たしめているのは、「自然との対立といふ途を通じてしか人間は自己の存在を示す途はない、『文化』とは、まさにさういふ人間の自然への対立（叛逆）のいとなみが、建設したオベリスクである」という自然観、人間観であり、またそこからは「日本人の場合、さういふ『対立』とか『闘争』とかいふことばに、全くふさはしからぬほど、妥協的、微温的であつた」という、言説が成される。そして、「前人間の原始性が、ついこの間までは、日本人固有の健康さだとか、現実性だとかいふまことしやかなことばで、自己陶酔の材料に供せられてゐた」として、「源氏」や「平家」から現代に至る日本の文学における「詠嘆的懐古的敗北的な哀歌」や、「人間と自然との、低い、方便的な野合」、「自然の歪曲と思考のデカダンス」などを指摘し、さらに、「自然の中に勝手に人間の恣意的な思考、情緒を持ち込」み、「自然を、勝手に、人間的に」「歪めて、飴細工の様に鑄型にはめこんで手品をやつて見せる思ひ上がり」が、近代から現在の歌にまで流れているとして、それは健康な、人間的な共感を呼びうる美しさや瑞々しさをもたない、非理性的、反人間的なデカダンスだという。

この見解の当否はさておき、ここには、人間と自然との融合・一体化（言語・身体・感性・思想）に日本的とされる人間観、自然観を置く言説と、人間の叡智や意志による人間と自然との対立・止揚に、文化の建設をみようとする近代的・西欧的とされる人間中心主義や合理主義とを対峙して、後者を評価していこうとする意思が明確に表明されている。短い文章ゆえ、久保田の思想の拠つて立つところや、その具体的な展開は見られないが、極めて「近代的」な思考の型がそこに見られよう。おそらく、茂吉のもっている近代性は、久保田がこの文章で否定的にいう

「前人間的原始性」と近代生活との融合の中にあると思われ、また広くいえば短歌を成り立たしめてきた表現の骨格は、多く自然の景物と心情との一体化にあると筆者は考える。<sup>(14)</sup> その点からいうと、久保田の論においては、時代の「近代的」なるものへの指向が先行して、茂吉の評価にしろ、自然の問題にしろ、一つの問題提起に収まっていると思う。しかしそのような問題が、敗戦、被占領を契機として提起された戦後の歴史的必然性は十分理解できる。そして、茂吉、自然、近代、伝統といった問題は「八雲」においてある程度深められたが、それが現在にまで及ぶ問題であることはいうまでもない。その意味でも、久保田の提起の意義は大きいだろう。

2

さて、二つの「歌壇展望」を通して、久保田の指向とその問題性を考えてきたが、全14冊の「歌壇展望」では、さまざまな視点から短歌状況がとらえられ、厳しい批判がなされており、当時の歌壇状況と久保田の問題意識をうかがわせる。

まず、通巻2号(47・1)では、現代の「歌よみに与ふる書」はどのように書かれるべきかと問い、「もういちど『歌よみに与ふる書』がかかれるとするならば、今度こそは、小説や詩の世界の歩調におくれない様に、それが書かれなくてはならない」とし、歌壇の中に閉じ籠り、同時代の事象や文学に目を開かない歌人を批判し、現代の「歌よみに与ふる書」は特定の個人が語るといった形ではなく、文化、芸術の広い世界から読み取っていくべきだとする。また通巻3号(47・3)「新人について」では、どこにも新人・新風が存在しないことをいい、通巻5号(47・5)「エディプスの悲劇」では、紙不足の深刻化をいって「文化革命の進行を巧妙に阻止」しようとしている「反動勢力」



を批判する。「八雲」はこの号から32頁立てと、頁数が大幅削減されており、新風の出ていないこととも合わせてある危機意識がうかがえる。

また通巻6号(47・7)「結社組織について」では、短歌否定論に対して、「歌作るを生意志なきことと吾も思ふ歌論らふ阿呆どもの前に」(土屋文明)「また例の顔ぶれにして歌のこと論ずと云へば読みにし等し」(山口茂吉)と詠み、また「時局便乗の雑文家に拠つてなされてゐる」「あまり作歌が盛んであるから、羨望の気持ちも手伝つてけちをつけると謂つた具合である」(高田浪吉)と記した雑誌「アララギ」を批判し、土屋―山口―高田に「日本型封建的セクシヨナリズム」を指摘して、「宗匠的結社制度」の解体を主張し、また通巻7号(47・8)「そこではない」では、「天声人語」と「改造」の座談会を批判して、「第二芸術論」や「短歌否定論」は、日本文学全体への反省と自己批判を、短歌・俳句を焦点として語ろうとしたものであったのに、現在それが「短歌いちめ、俳句いちめといふスケールに卑少化」せしめられ、「問題の正しい方向」がくまらせられていると述べ、また通巻9号(47・10)「分業の確立」では「実作者の体験をふりかざして、非実作者である批評家からのことばを拒絶しようとするポーズ」が歌壇に濃厚になっていることを、尾山篤二郎の文章などを取り上げて指摘する。閉鎖的な場としての結社を批判し、批評の未成熟を批判しながら、第二芸術論に繋がる短歌否定論の原点を確認して、それが次第に矮小化していることを批判しているが、背後に第二芸術論・短歌否定論を溶解し、また無化していく、歌壇と時代の微妙な変化がうかがえよう。

また、通巻8号(47・9)「新しい制服」では、「『インテリと罵られ無産運動に加はらむとしき二十年前は』(紅梅)といふ様なものをあわてて発表して、戦時中のアリバイにし新しい時代とのずれを躍気になつてうめようとした」

前川佐美雄の現在を批判し、また本能と性欲をことさら全面に出すような現代の歌を批判する一方、「めぐりきし五月一日登校しヒューマニズムの講義をしたり」（中野菊夫）、「労組の青年隊のコーラスは未来図からのひびきをつたふ」（小名木綱夫）に、「テーマのとり方は謬つてはゐない」が「時代の常識によりかかつて、形象化が行はれてゐるといふ意味で、戦時中の制服短歌の句がする」と批判する。そして通巻11号（47・12）「一所には歩めない」では、五味保義が「有用な批評は、非作家、作家いずれの側から出るにせよ、一旦批評対象たる作家と一所に歩むことが必要である」と述べているのに対して、「解明の手がかり」が「吾われに全然与へられてゐない」作品の多いことを東京歌話会編輯の「短歌季刊」第二輯の作品をとりあげていう。これらには久保田の歌への一つの指向と、求めるべき方向の作品を見出だせない編集者としての焦燥をうかがわせる。なお通巻12号（48・1）「剣を投ぜん為に」では、斉藤茂吉が「余情」第五輯に発表した「辺土独吟」三十首を高く評価し、短歌否定論の中にあつて、「かれひとり超然と在りうる權威を確実に留保する者として在る」ことをいい、「茂吉の高さは、恒に吾われをして、それをうち仆し、それをうち越えるべき情熱への誘ひとして吾われの眼路に峻しくかゝつてゐる」と高い評価を与えている。

また、吉井勇、川田順の二人の歌人を加えた「天皇陛下の御前に文芸を語る」という座談会（小説新潮）を話頭に、天皇と歌人との関係を述べた通巻10号（47・11）の「硬直した表情」、文部省案新仮名づかいが出されている中、「ことばと文字が、人間の思惟と精神の拠点である」という立場に立ちつつ、田仮名、新仮名の「観念的二者選一主義」を批判する通巻13号（48・2）の「ことばと文字」など、時代状況をうかがわせ、終刊の通巻14号（48・3）「入門書について」では「誰にも同じ様に、たどるべき捷徑があるといふ考へ方をうちこわしてゆくこと」が必要な芸術文学において、「入門書」や「作歌手引書」は必要かと問い、渡辺順三「あたらしい短歌入門」は「入門」とある

が作者の立派な短歌論で評価すべきとしつつ、中野菊夫・佐々木妙二「新しい短歌のつくりかた」については、職場や農村で働くひとたちの「生いきとした要求や情熱と一緒に新しき方向を見つけてゆかうとする創造的なくるしみとよろこびによつて、この書物は生きてゐるでせうか。あなたの読後感をもうかゝひたいとぞんじます」と疑問を呈して終わっている。久保田は、創刊号の後記で、「八雲」に専門歌人による芸術としての短歌を求めたが、この「入門書」をめぐることは、芸術と生活、政治と文学、短歌の民衆化といった時代のテーマを蔵し、久保田の一つの問い掛けがうかがえよう。

このように久保田の「歌壇時評」は、第二芸術論・短歌否定論の歌壇への問い掛けを出発として、その後の展開、歌壇の動向の一端をとらえ、極めてアクチュアルに一年半の動きを浮き彫りにしている（その一部は久保田の『第二芸術論時代』（59年刊）に所収されている）。そこには久保田の、ある意識の先行や視点の一方性も見られるが、敗戦後の言語空間の一つのありようを示しているとともに、それによってなされた短歌と日本文化に対するひとつの根源的な問いの形が示されているといえよう。そしてそこには、短歌を文学の一ジャンルとして、他と同格に並べながら革新せしめようとする、久保田の志向がうかがえる。これらは、久保田の同時期の文章や、時代の様々な動向とともに位置付けて行かねばならないが、久保田のその後の編集者としての活動や評論活動のひとつの原点として、また戦後短歌の草創期の動向を伝えるものとして、貴重な意味をもつものといえるだろう。

## おわりに

本稿では、敗戦後の文化状況の中で提出された第二芸術論・短歌否定論の概要を追ひ、その中で刊行された短歌雑誌「八雲」の指向と内容を概観し、その牽引者であった久保田正文の「八雲」における志向とその問題を考えてきた。すでに木俣修や篠弘によって、緻密な分析がされているが、本稿は雑誌を読みすすめながら、五十年後の現在から戦後の出発を振り返り、その今日的意義を考える契機を求めようとしたものである。何度も述べたように、敗戦後の言語空間のなかにあつて、過去の日本文化を批判しながら、人々が「近代」という語に託したものは極めて大きかつた。そして、「八雲」の指向は、敗戦後の状況の中で、新たな近代に向かつて、短歌形式と日本の近代をとらえ直そうとしたものであるが、外部からの一般的な論と、様々な要素や歴史が凝縮している作品との架橋はなかなか果たされなかつたともいえよう。そして、また、それは結果的に、日本という場における「近代」への指向が、現実の中で持つ重層性や矛盾をも認識させる可能性をもつものでもあつた。短歌形式とそれに繋がる世界は、累積された日本文化とその近代化の問題を、その内部に深く抱えていたといえよう。

さて、戦後の短歌否定論で展開された問題は、そこで何らかの解決がなされたというわけではない。短歌をめぐる諸制度（歌壇・結社・天皇制他）の問題、また短歌という固定した形式とそれに結ぶ発想や抒情や内容の類型性や限界の問題、個の主体性や自然と人間との関係の問題、批評と読者の問題など、それらは日本人や日本文化総体のありかたの問題と関わりながら、今日にまで引き継がれている。また、第二芸術論・短歌否定論を生んだ戦後の

諸価値を、現代という時点から、肯定否定の両面から再考する必要があるだろうし、短歌否定論を通して逆に現在浮き彫りにされる、短歌の特徴やその有効性の認識もあるだろう。新たな「近代の超克」がいわれる現在、「近代」を相対化するというポスト・モダンの言説自体を、もう一度相対化する視点をもつためにも、戦後の第二芸術論・短歌否定論が提起した問題を、もう一度見直していくことが必要だろう。

注

- (1) 青木保『日本文化論』の変容(90年) 一二頁。
- (2) 桑原武夫「第二芸術——現代俳句について」(『世界』46・11)。同論は桑原『現代日本文化の反省』(47年)、『第二芸術論』(52年)、また八雲書店から発行された共著『短詩型文学論』(48年)などに再録され広く読まれた。
- (3) 白井吉見「展望」(『展望』46・5)。後に『短詩型文学論』(48年)に「短歌への訣別」として再録された。
- (4) 篠弘は、小田切秀雄が文学者の戦争責任を追究した「文学檢察五」(文学時標)で、茂吉の戦中と戦後の歌が「同じ調子」であることを批判していることを指摘し、白井の批判が「小田切の茂吉批判にうながされたこと」を推測している(『戦争責任の追及』『歌壇』95・8)。
- (5) 白井吉見「第二芸術論前後」(『蛙のうた』72年所収)
- (6) 篠弘『近代短歌論争史』(76年・81年) 参照。
- (7) 小田切秀雄「歌の条件」(『人民短歌』46・3のちに『短詩型文学論』所収)
- (8) 久保田正文「戦後乱世の片影——「八雲」の編集」(『短歌現代』95・6)
- (9) 『現代短歌辞典』『日本近代文学大事典』などでは木俣を「顧問」としている。また木俣自身「八雲」について「これには筆者が関係しているので、みずからのことは書きにくい」(『昭和短歌史』)と記している。
- (10) 篠弘『現代短歌史Ⅰ 戦後短歌の運動』(83年)
- (11) 木俣修『昭和短歌史』第十章。
- (12) 荒正人、小田切秀雄(後退会)、平野謙、佐々木基一、中田耕治、平田次三郎など。

- (13) 窪田空穂「短歌の民衆化について」〔まひる野〕46・3、窪田章一郎「民衆詩の伝統と異端」〔短歌研究〕51・5 他。  
 (14) 拙著『うたの生成・歌のゆくえ』(95) 参照。

## 「八雲」総目次 付文章執筆者索引

### 凡例

\*以下は「短歌雑誌八雲」全14巻の総目次である。

\*各号内の掲載順は、文章を前に、作品を後にし、その内部では目次掲載順を基本にして、検索の便のために若干の入れ替えを行った。

\*評論などの題名は、本文を参照しつつ目次による。ただし、目次の誤りと思われるものは本文による。目次の脱落、重複などは改めた。また内容を明らかにするために、本文につけられている「歌壇展望」などの標題を記したところもある。

\*作品については、短歌作品以外については、詩、俳句、小説などの別を括弧で示した。原則として、目次に題のあるものはそれを記し、目次に十首、十首詠、新人詠などとあるものはそれを題として、作者をあげた。

\*このほかに、1、2、3、4、6、10、11、12、13、14号には、嘉門安雄による口絵解説がある。

\*西暦の上二桁は省略。最下段の算用数字は頁を示す。

\*「文章執筆者索引」は、文章執筆者を五十音順に示し、その号数を通巻番号で示した。同じ号の番号が重複する場合は、同号に二つの文章を載せている。

\*「文章執筆者索引」は評論、論文、書評などの文章、及び座談会や対談の出席者に限り、創作（短歌、俳句、詩、小説など）は含めない。

\*索引では編輯（集）後記（通巻4号までを久保田、5号からは狩野（金三）の署名により執筆されている）及び口絵解説は省略した。

### 創刊号 46年12月

### 通巻1号

短歌精神の解放

ゲオルゲの中世詩

芸術に於ける美について

藤村の「家」について

憲吉と白秋（白秋に宛てた憲吉の手紙）

「赤光」の連作歌

岡崎 義恵 2

手塚 富雄 16

本多 顯彰 23

平野 謙 34

木俣 修 40

藤森 朋夫 50

晩年の父啄木	石川 政雄 26
草の中の仏達	前田 夕暮 28
アララギ連峯（歌壇地図）	岡山 巖 46
歌壇展望	久保田正文 38
樹木と短歌	上原 敬二 33
前川佐美雄著「紅梅」について	平田次三郎 55
作品	
冬曆（五十首）	木俣 修 8
清雁吟（同）	前川佐美雄 12
最上川向川寺（十首）	斎藤 茂吉 30
城南消息（同）	吉井 勇 31
進駐軍のゐる風景（短歌ルポルタージュ 十首）	阿部 静枝 45
作品（十首）五島茂、佐藤佐太郎、鈴木英夫、香川進、堀内通孝、岡野直七郎、坪野哲久、岩間正男、長谷川銀作、山下陸奥、筏井嘉一、橋本徳壽	山口 誓子 29
蟹（俳句）	栗林 種一 43
曜変天目讃（詩）	久保田 64
編輯後記	
編輯人 久保田正文 発行人 中村梧一郎	
発行所 株式会社八雲書店（東京都本郷区森川町 一	

新年号 47・1	通巻2号
貴族的文学のゆくへ	土居 光知 2
歌よみに与ふる書	
他山石語	吉川幸次郎 8
衰弱した歌・その再建	小田切秀雄 12
アタラクシアと禪	出 隆 16
北原白秋論	吉田 精一 38
「若きパルク」に就いて（ポオル・ヴァレリイに就いての覚書）	菱山 修三 50
森川町今昔	関根 秀雄 40
喪書記	中島 健蔵 47
短歌の運命について（座談会）	26
臼井吉見、岡野直七郎、木俣修、五島茂、中野好夫、能勢朝次、広野三郎	
白秋と千櫨	木俣 修 64
万葉集と現代	近藤 忠義 43
多摩の流域（歌壇地図）	岡野直七郎 68
歌壇展望	久保田正文 58
「つゆじも」について	岡山巖 坪野哲久 62
作品	
春（五十首）	筏井 嘉一 20
麻布雑記（同）	山口 茂吉 23

夜半の音 (十首)

釈 迢空 37

新東京風物詠 (十首)

坪野哲久、五島茂、堀内通孝、

土岐善麿、木俣修、中村正爾、吉田正俊、白井大翼、窪

田空穂、岡野直七郎、矢代東村、五味保義、鐸木孝、香

川進、飯田莫哀 70

十首詠 宮柊二、狩野登美次、斎藤史、服部直人 神山 54

裕一、松田常憲

編輯後記 久保田 81

二・三月号 47・3

通巻3号

心の俳諧 本多 顯彰 2

「若きパルク」に就いて (二) 菱山 修三 26

特輯 国語問題 コバヤシ・ヒデオ 8

文章談議 岡山 巖 12

新しき表現と国語 野上豊一郎 16

クウィラクーチ教授 渡辺 一夫 36

過激な夢

現代作家論 木俣修論 矢代 東村 30

―新作「冬暦」を中心として 久保田正文 47

新人について (歌壇展望)

若き世代よりの公開状 木俣 修 20

吉井勇氏へ 堀内 通孝 22

土岐善麿氏へ

川田 順氏へ

「歌の別れ」のアイロニー

千樫と白秋

明星地帯 (歌壇地図)

作品

業余北遊 (五十首)

炎と雪 (同)

闘歌 (二十首)

某印刷工場にて (短歌ルポルタージュ 十首)

十首詠 岡部文夫、扇畑忠雄、吉野鉦二、高木一夫、山

下秀之助、服部忠志、生方たつゑ、館山一子、常見千香

夫、石川信雄、広野三郎、白井善司 50

霜月 (俳句) 日野 草城 45

冬の燭 (同) 加藤 楸邨

編輯後記 久保田 64

五月号 47・5 通巻4号

自然観の問題 三枝 博音 6

自然観と文学 西郷 信綱 11

万葉人の自然観 折口信夫 白井吉見 20

短歌と文学 (対談)

短歌の運命 桑原 武夫 34



「草の葉」に寄せて

現代作家論 筏井嘉一論

赤彦と白秋

人間の否定と人間の肯定——文芸時評

自然について（歌壇展望）

作品

冬露（五十首）

十首詠 鹿兒島壽藏、安部忠三、窪田章一郎、中野菊夫、

藤森朋夫、谷馨、田中武彦、杉浦翠子、高安国世 50

贖罪序歌（詩）

背戸は赤松の山（詩）

編集後記

六月号

47・6

短歌の新方向

日本文学における叙事詩の問題

短詩型文学の批評に应う（座談会）

岡山巖、木俣修、近藤芳美、中野菊夫、中村草田男、

古家樵夫、八木絵馬、編集部久保田正文

短歌・歌人・短歌雑誌

ザヨーチアン詩人たち

「編笠」を読む（書評）

エディプスの悲劇（歌壇展望）

中野 好夫 29

杉浦 民平 48

木俣 修 44

服部 直人 39

久保田正文 42

吉田 正俊 2

草野 心平 18

久保田 56

通巻5号

クボカワ・ツルジロー 1

西郷 信綱 8

13

佐々木基一 20

福原麟太郎 22

岩間 正男 21

久保田正文 33

作品

壁画（五十首）

白梅匂ふころ（二十首 以下同）

浮図 上田穆

阿蘇 前田夕暮

寒夜 斎藤史

聖痕（小説）

編集後記

七月号

47・7

結社の問題

結社の本質とその日本の性格

短歌結社批判

結社解消論について

茂吉の「悲しきWoman」をめぐって

「日本的なもの」の限界（文芸時評）

現代作家論

前川佐美雄論

五島美代子論

結社組織について（歌壇展望）

「雪線」（書評）

作品

山上の雪（五十首）

鈴木 英夫 6

高群 郁 24

翠子

栄一

神西 清 28

狩野 33

通巻6号

福武 直 4

土岐 善麿 8

坂本 徳松 12

小田切秀雄 20

石川 信夫 27

荒 正人 30

平林たい子 31

久保田正文 33

福原麟太郎 15

斎藤 茂吉 1

新人詠 (十二首) 中村俊文、わがつまけいすけ、猪瀬

踏花、池田宗矩、牧野春男、清水房雄、丸山浦平、吉野

昌夫、東博、佐竹隆、野瀬不破城、須東育 16

翼の歌 (詩) 壺井 繁治 24

何十年か何百年か後の (詩) 小野十三郎 25

弁当 (詩) 山之内 貌 26

編集後記 狩野 33

八月号 47・8 通巻7号

特集作家論

萩原朔太郎に関する覚書

石川啄木

長塚節襟記

白秋と茂吉の交流

現代作家論 山口茂吉論

人民短歌に望む

「あづま路」を読む (書評)

そこではない (歌壇展望)

作品

犬儒詠 (五十首)

初夏身辺抄 (同)

十五首 中村孝助、長谷川銀作、江口渙、川俣喜美子、

内田穰吉、大野誠夫、高須茂、鹿兒島壽藏、飯田莫哀、

渡辺順三、尾関栄一郎、近藤芳美

二十首 冷水茂太、矢代東村、宮柊二、

三十首 小暮政治、堀内通孝、足立公平、木俣修

編集後記

九月号 47・9

短歌の詩的性格

叙事詩の問題

短歌と叙事詩

歌物語における短歌の位置

写真と象徴

諸家に答える

不二・民草について

現代作家論 佐藤佐太郎論

書評「真名井」「茜雲」

新しい制服 (歌壇展望)

作品

埃吹く街 (五十首)

十首詠 平沢進八郎、泉甲二、三田藩人、山形義雄、長

尾千楨、富永貢、瀬野忠次、松本千代二、生井武司、加

藤克己、河合恒治、関登久成、福戸國人、森本治吉、西

村陽吉

マチネ・ポエティク作品集 (詩)

通巻8号

竹内 敏雄 1

本多 顯彰 7

岡崎 義恵 13

佐藤 信衛 20

土岐 善麿 25

岩上 順一 28

中田 耕治 30

島田謹二・藤森成吉 18

久保田正文 49

近藤 芳美 36

33 39

編集後記

十月号 47・10

「みだれ髪」の構造

叫びについて

新歌人集団について

朝の詩人

現代作家論 吉田正俊論

「斎藤茂吉ノオト」の裂目

随筆

巴里

街暗し

古代感愛集（書評）

七月号新人詠批評

分業の確立（歌壇展望）

作品

春鹿集（五十首）

十首詠 小市巳世司、津軽照子、木村光太郎、中村正爾、

岡部文夫、佐々木妙二、中野嘉一、大橋松平、五島茂、

岡麓

新人詠（十首） 岩佐徹道、岸原広明、青木一雄、河村

哲史郎、鹿間義之

二つの歎び（小説）

通巻9号

狩野

小林 英夫 1

福田 定良 12

杉森 久英 19

杉 捷夫 32

丸山 静 34

余寧金之助 36

辰野 隆 16

岸田日出刀

坂本 徳松 21

小田切秀雄・岡本潤 40

久保田正文 49

鐸木 孝 1

宮内 寒瀾 42

編集後記

十一月号 47・11

特集 詩歌の韻律

音からみた日本の詩

北極星はなぜ北にあるか

正岡子規

「重き流れのなかに」と日本短詩の世界と手塚

ジュリアン・バンダ

現代作家論 鈴木英夫論

茂吉短歌の限界性

納得できぬこと

書評 西脇順三郎「旅人かへらず」

新刊紹介 柳田国男「俳諧評釈」

硬直した表情（歌壇展望）

作品

落月依稀（五十首）

学童疎開の歌（二十首）

十首詠 結城哀草果、吉野鉦二、服部直人、杉鮫太郎、

中野菊夫、志水賢太郎、村田利明、佐々木信綱、金子き

み、鈴木一念、川上小夜子、坂口保

新人詠 堀正三、米口実、田辺寅夫、安田章生、島内将

雄、島田白紅

通巻10号

狩野 49

楓田 琴次 4

兼常 清佐 8

寺田 透 12

杉 捷夫 28

五島 茂 22

岩間 正男 32

渡辺 順三 46

木下常太郎 17

久保田正文 49

江口 渙 1

永上 唯史 31

中野菊夫、志水賢太郎、村田利明、佐々木信綱、金子き

み、鈴木一念、川上小夜子、坂口保

新人詠 堀正三、米口実、田辺寅夫、安田章生、島内将

雄、島田白紅

宮内 寒瀾 42

101

秋雨の日

紫陽花

編集後記

十二月号 47・12

詩精神の将来について

眠つてゐた韻律考

アンケート 短詩型文学の問題

文芸と現実性

一九四七年の作品

一九四七年の評論

随筆 まぼろし

書評

八雲既刊号主要総目次

一所には歩めない(歌壇展望)

作品

生命の波動(五十首)

十首詠 木俣修、服部忠志、山下陸奥、福田定良、平井

康裕、常見千香夫、冷水茂太、中川武、岡野直七郎、原

三郎、大内規夫、中村俊文、加藤将之、丸山浦平、堀内

通考、

新人詠 石井国男、伊久間保夫、市川健次

少年と老詩人(俳句)

岡本 潤 18

野間 宏 20

狩野 金三 49

通巻11号

土居虎賀壽 4

相良 守次 12

山本 正男 22

長谷川銀作 27

土岐 善磨 30

岩本 素白 32

編集部 35

久保田正文 49

杉浦 翠子 1

栗林一石路 20

バラード・ジャポネーズ(俳句)

冬来る(俳句)

詩三章(詩)

編集後記

新年号

茂吉の問題

短歌の青春時代(対談)

奴隷の韻律

ギリシヤの抒情詩

「愚神礼讃」を思ひだして

「赤光」に関する調査

剣を投ぜんために(歌壇展望)

歌集評 吉田正俊「朱花片」

作品

楡の曇り(九十七首)

わが哀歌(五十首)

ひとりしづか(五十首)

一隅(五十首)

ムツイリ(長詩)

編集後記

二月号

日本の古典の行方

古家 樞夫 20

富沢 赤黄男 21

菱山 修三 10

狩野 金三 49

通巻12号

白井 吉見 16

土岐善磨・木俣修 21

小野十三郎 28

呉 茂一 32

渡辺 一夫 36

北住 敏夫 41

久保田正文 49

編集部 20

釈 道空 1

常見千香夫 7

柴生田 稔 10

木俣 修 13

一条正美訳 44

狩野 金三 49

通巻13号

西郷 信綱 4

タクボク論	コバヤシ・ヒデオ 10
歴史の進展と共に	渡辺 順三 16
釈道空論	坂本 徳松 20
ローマ時代の恋愛詩	岩崎 良三 25
近藤芳美論	平田次三郎 28
「赤光」に関する調査 2	北住 敏夫 40
書評 土岐善麿「京極為兼」	能勢 朝次 48
岩間正男「炎群」	久保田正文 49
ことばと文字(歌壇展望)	久保田正文 49
作品	
小現美集(五十首)	宮 柊二 1
十首 袋一平、岡崎義恵、日夏耿之介、高田保馬	8
十首 内田穠吉、巽聖歌、大野誠夫、吉田正俊、小名木綱夫、高安国世	30
十五首 飯田莫哀、高群郁、五島美代子、鈴木幸輔、矢島祐利、岡山麓	34
ムツイリ(長詩) 2	レーモントフ・一条正美訳 44
編集後記	狩野 金三 49

三月号 48・3	通巻14号
文学史と創作方法の問題	クボカワ・ツルジロー 4
杜甫の憂鬱	吉川幸次郎 17
「赤光」に関する調査 3	北住 敏夫 22
詩歌集「やまかは」	土居 光知 26
真実の歌声をひびかせよ	中村 俊文 33
書評 「新頌・富士」「墨宝抄」	瀬木 二郎 32
入門書について(歌壇展望)	久保田正文 43
作品	
家常茶飯(五十首)	高安 国世 1
十首詠 矢代東村、岩間正男、足立公平、中村孝助、小関茂、川俣喜美子、小暮政治、長谷川銀作、前田透、築地藤子、橋本徳壽、神西清、片山敏彦	36
禿(詩)	金子 光晴 20
ムツイリ(長詩) 3	レーモントフ・一条正美訳 44
終刊のことば	編集部 49
編集後記	狩野 金三 49

第二芸術論と雑誌「八雲」

文章執筆者索引																			
あ																			
赤木	健介	7																	
浅見	淵	7																	
荒	正人	6 7																	
い	石川	信夫	6																
石川	政雄	1	6																
出	隆	2	1																
岩上	順一	8	2																
岩崎	良三	13	8																
岩間	正男	5 10	13																
岩本	素白	11	5																
う	上原	敬二	1																
白井	吉見	2 4 12	11																
お	岡崎	義恵	1 8																
岡野直七郎		2 2	2																
岡山	巖	1 2 3 5	2																
小田切秀雄		2 6 9	2																
小野十三郎		12	12																
折口	信夫	4	4																
兼常	清佐	7 10	7																
河野	慎吾	7	7																
き																			
岸田日出刀		9																	
北住	敏夫	12 13 14	9																
木下常太郎		10	10																
木俣	修	1 2 2 3 3 4 5 12	10																
く	クボカワ・ツルジロー	1 2 3 4 5 5 6 7	10																
久保田正文		8 9 10 10 11 12 13 13 14	8																
こ	呉	茂一	12																
桑原	武夫	4	4																
五島	茂	2 10	4																
小林	英夫	3 9 13	2																
近藤	忠義	2	2																
近藤	芳美	5	5																
さ	三枝	博音	4																
西郷	信綱	4 5 13	4																
坂本	徳松	6 9 13	4																
相良	守次	11	11																
佐々木基一		5	5																
佐藤	信衛	8	8																
颯田	琴次	10	10																
島田	謹二	8	8																
杉浦	民平	3 4	3																
の																			
能勢	朝次	2 13	2																
野上豊一郎		3	3																
中山省三郎		7	7																
中村	俊文	14	14																
中村草田男		5	5																
中野	好夫	2 4	2																
中野	菊夫	5	5																
中田	耕治	8	8																
中島	健蔵	2	2																
土岐	善麿	6 8 11 12	6																
土居虎賀壽		11	11																
土居	光知	2 14	2																
寺田	透	10	10																
手塚	富雄	1	1																
坪野	哲久	2	2																
辰野	隆	9	9																
竹内	敏雄	8	8																
た	関根	2	2																
せ	瀬木	14	14																
鈴木	英夫	3	3																
杉森	久英	9	9																
杉	捷夫	9 10	9																

ふ						ひ		は
福田 定良	福田 恒存	広野 三郎	平林たい子	平野 謙	平田次三郎	菱山 修三	服部 直人	長谷川銀作
9	7	2	6	1	1 13	2 3	4	11

ま						ほ		
丸山 静	前田 夕暮	本多 顯彰	堀内 通孝	古家 樞夫	藤森 朋夫	藤森 成吉	福原麟太郎	福武 直
9	1	1 3 8	3	5	1	8	5 6	6

						わ			よ			や	
						渡辺 順三	渡辺 一夫	余寧金之助	吉田 精一	吉川幸次郎	山本 正男	矢代 東村	八木 絵馬
						10 13	3 12	9	2 3	2 14	11	3	5